

大賞

『死んでしまう系のぼくらに』

最果タヒ 著、リトルモア、2014.

吉村 美咲（経営学部 経営学科 2年）

最果タヒの詩は、たぶん理解できなくていい。むしろ分かった気にならない方がいい。意味を求める人からすれば、ただの謎の言葉の羅列に見えるだろう。でも私はそこに惹かれた。意味不明さの向こうに、心を撃ち抜く何かがあった。

きっかけは京都のホテルで行われていた、最果タヒさんとのコラボ企画だった。『詩のホテル』。その言葉に心底しびれ、気づけば衝動のまま予約を取っていた。実際にホテルへ足を踏み入れた瞬間、私は言葉に飲み込まれた。ドアにも壁にもベッドにも、歯ブラシにもコップにも、最果タヒの詩が散りばめられている。視界いっぱいに広がる言葉。まるで、現実の空間が詩に変換されたみたいだった。

ホテルの中だけじゃない。詩は“街”にも溶けていた。建物の壁、曲がった先のクリーニング屋、人気のない自販機、地域の人が集まる銭湯の中。

どこにでもある風景が、詩の言葉によって不意に意味を帯びる。“日常が詩に侵食される”体験は、ただただ楽しく、そして静かに心の奥を震わせた。

部屋に戻りベッドに横たわると、視線の先にも言葉。天井までもが詩になっていた。ああ、これはもう逃げられない。すっかり最果タヒに魅了されてしまった。もう信者である。

大学に戻って、図書館で最果タヒの本を探すと、数件ヒットした。けれど多くは評論やエッセイで、詩そのものがしっかり載っているのはほんのわずか。その中で、私を真正面から迎え撃ってきたのが『死んでしまう系のぼくらに』だった。

正直に言う。

もし“あのホテルの体験”なしにこの本を開いていたら、私は数ページで挫折していたと思う。

形を持たない言葉たち、意味の影だけを見せて逃げていく詩。理解しようとするほど遠ざかっていく。

でも私はすでに“詩に包まれる”という経験をしてしまっていた。だからこの本の言葉は、ただの詩ではなく、あの日本ホテルの壁にあった言葉の“続き”として読めた。

最果タヒの詩は、大勢に向けて柔らかく開かれていない。分かることには刃のように刺さり、分からぬ人にはただ通り過ぎる。それでいい。詩は人々、万人のために書かれていないのだから。

じゃあ、なぜそんな本を紹介するのか。理由はひとつ。この本で何かが震えた人は、きっと“自分の世界”を持っているからだ。あなたがこの本を読み、最果タヒの言葉に掴まれてしまったなら——きっとあなたは孤独ではあるけれど、その孤独を抱えたまま世界を見つめられる人だ。そんな人なら、私はぜひ友達になりたい。